
ポケモン不思議のダンジョン 理想の搜索隊

ムウマージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 理想の捜索隊

【Nコード】

N7159X

【作者名】

ムウマージ

【あらすじ】

星の衝突をまのがれて、さらに時の停止騒動も収まり、世界は真の平和が訪れたと思われていた
だが・・・そんな中、この世界に更なる危機に直面する・・・
それは、ほんの一つの出会いから・・・

もうさ、このストーリー次回作みたいのでおk？

とかいう流れでオリジナルストーリー！

なんて思ったポケモン不思議のダンジョン 星の救助隊の続編！

プロローグ（前書き）

はぁ〜い！ムウマージです！

勢いで新小説投稿！

今回はDPシリーズ？違うな、BWシリーズだ！
という話

それではどうぞ！

プロローグ

ポケモン不思議のダンジョン 理想の搜索隊 プロローグ

雷が鳴り響く嵐の空

「はぁ・・・はぁ・・・」

「もっと・・・もっと早く!」

嵐の中を飛ぶ一匹き、その背中に乗っている一人

『わかってる・・・わかってるよ!』

カツ

雷が落ちる

『あぁっ!』

雷が一匹の翼をかする

「わっ!」

雷が翼にあたり、バランスを崩したせいで。背中に乗ってる一人が落ちかける

ガシッ

落ちかけた所を一匹がギリギリ、手を掴む

『ぐっ・・・』

「・・・！離して！このままじゃあなたも落ちちゃう！」

『だめだよ！そんな・・・！』

「あなただったらきつとあれを見つけられるはず・・・！私は大丈夫だから！離して！」

カッ！

大きな雷が落ちる

『うわあああああ！！』

「きゃあああああ！！」

一匹と一人が離ればなれに墜ちて行く・・・

山の草原

嵐は過ぎ去り、雲一つないまっさらな空

そんな中、山にある草原に一匹のポケモンが倒れていた

『う・・・ここは・・・？』

『私・・・生きてるの？』

『うつ・・・駄目だ・・・意識が薄れて・・・』

『フライゴン・・・後はたのんだ・・・よ・・・』

『・・・』

そう言う和一匹のポケモンは気を失った

プロローグ（後書き）

シェーイ！プロローグ 完！
次回ゆっくりしていつてね！

第1話 山の草原で（前書き）

い、い（。ん）／デキマシタ
ソレデハドウゾ

第1話 山の草原で

第1話 山の草原で

山の中腹 居住区

ここはポケモン達が住む山の中腹にあるポケモン居住区

そこにいる一匹のミジュマル

「うわぁー！綺麗な虹ー！」

空を見上げながら言う

「・・・あれ？なんだろう・・・？」

首を休めようと下を向いた時、ふと、崖下の草原に草と別な物があるのが見えた

それを凝視する

「あっ！？ポケモンが倒れてる！？？」

それがポケモンだとわかり、すぐさま、そのポケモンの元へと走っていった

山の中腹 山の草原

タッタッタ・・・

倒れていたポケモンの近くに駆け寄る

「ねえ！大丈夫！？ねえ！ねえってば！」

倒れているポケモンを揺らす

「う・・・う・・・ん？」

倒れていたポケモンが目を覚ました

「よかったぁ・・・ねえ、大丈夫？」
ツタージャに呼びかける

「え・・・うん・・・ん！？」

それを聞いて、返したあと、驚きの声を漏らした

「？どうかしたの？」

「あ・・・あれ？おかしいな・・・？」

「なんで・・・なんでミジュマルが喋ってるの・・・！？？」

・・・

「え？なんでって・・・あなたでしょ？ツタージャ」

「え・・・？わ、私はツタージャなんかじゃないわよ！私は人よ！」

目の前にいるツタージャの言葉に困惑する

「ええ！？で、でも、どこからどう見たって、ツタージャだよ！」

「そんな訳・・・」

ツタージャが自分の手を見て、硬直した

「え・・・？」

ツタージャが手から滑るように体に目をやった

「な、な、な、なにこれえ！？」

「嘘でしょ！？なんで私ツタージャになったになってるの！？」

「だ、大丈夫？」

「大丈夫な訳ないわよ！！」

「と、とにかく落ち着いて！冷静に考えよ！」

ツタージャを落ち着かせようとする

「う・・・うん・・・」

ツタージャが落ち着いてくれた

「それで・・・あなたは どうしてツタージャになったか分かる？」

「わかってたら、こんなに騒がないよ・・・」

「そうだよね・・・」

正論である

「それに・・・」

「それに？」

「なんでかわかんないけど、人間だった時の記憶とかほぼ覚えてないの・・・」

「覚えてない・・・？」

「うん・・・あ、でも、一つだけ覚えてる事があるの・・・」

「一つだけ・・・？それって・・・何？」

「名前・・・私の名前・・・」

「どんな名前なの？」

「えっと・・・リン・・・」

「リン・・・ていうんだ・・・」

リン・・・それが目の前にいるツタージャの名前なのだろう

「うん・・・」

「けど・・・人間がポケモンになるなんて・・・ありえるのかな・・・」

「それって、私の話、信じてないって事!？」

「ち、違うよ! リンの話は信じてるよ?」

「でも、何が起きたら、人間がポケモンになるんだらうって・・・」

「・・・」

ツタージャが首を下ろす

「ご、ごめん、なんかひどい事言ったかな・・・?」

さっきの自分の言葉がいけなかったのだらうと思い、謝る

「ち、違うよ・・・ただ、これからどうしようって思ってたね・・・」

「・・・」

ポトツ

ミジュマルが持っている貝から何かが落ちて、転がる

「あ、待って!」

ミジュマルはそれを追っていた

ミジュマルが落とした物は地面に空いていた穴に落ちていった

「あゝ!!」

「ど、どうかしたの？」

「わ、私の宝物が・・・落ちちゃったの・・・」

「穴・・・？」

リンがミジュマルの近くに寄る

「・・・この穴に？」

「・・・うん」

「・・・」

リンがその穴を覗き込む

「・・・大分深そうね・・・」

「一緒に取りに行つてあげようか？」

「え!?! ほ、ほんと!?!」

「うん、一応助けてもらったし・・・」

「あ、ありがとう・・・!」

「別に良いって、あのさ、なんかロープみたいのない？」

「ロープ？わかった、取ってくる」

そう言うミジュマルは自分の家へと走っていった

タッタッタツ・・・

「おーい！取ってきたよ！」

ロープを持って、ミジュマルがツタージャと合流した

「はい！」

「ありがとう」

ミジュマルからロープを受け取ったツタージャが礼を言う

受け取ったロープを近くにあった木に縛りつけ、もう一方の方の穴へと降ろした

「ところでさ、落とした物って何？」

「えっとね、丸くて、小さいんだけど、赤い色してるの」

「赤い色ね・・・」

「わかった、降りましょ！」

「うん！」

二匹がロープをつたって、穴に降りていく事にした

第1話 山の草原で（後書き）

！、イ（。ん。）／カン デス
ジカイモユツクリマツテテネ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7159x/>

ポケモン不思議のダンジョン 理想の搜索隊

2011年11月11日05時51分発行